

「Gastrointestinal Bleeding」

edited by Choichi Sugawa, Bernard M. Schuman, Carles E. Lucas

北里大学外科・教授 同・消化器疾患治療センター長

比 企 能 樹

胃腸等の出血については、数多くの著書がある。

今回、Choichi Sugawa ほか 2 名の編集による「Gastrointestinal Bleeding」が刊行された。全体として、584 頁のこの著書は、従来のそれと異なり、なかなか読みごたえのある書物であるといった感想が、私がこの本を手にしたときの第一印象である。

第一章を開いてまず目に飛び込んできた Charcot の文章がこの本を物語るにふさわしい言葉である。
 “Disease is very old and nothing about it has changed. It is we who change as we learn what was formerly imperceptible.” 第 1 章の「The Magnitude of the Problem」の頭に F.L. Green が、この Charcot の言葉を引用して、消化管出血が、いかに病態としても奥行きが深く、疾病として古くて、新しいものであるかについて述べている。

C. P. Swain の「Pathology of the Bleeding Lesions」の項は、切除標本、内視鏡像の対比はもとより、血管系の解剖の図示により、どの血管

の破綻が出血の原因であるかなどと、立体的な構築を考えた病理であり、読んでいて、非常に納得できる手法である。殊に、multiple erosion の標本や、病理組織の写真はかつての Konjetzny や Phul の著書を想い出させるものがある。当然、当時のものに比べると、カラー写真を駆使している点で、すばらしい表現力である。

更にこの書の特徴を挙げるならば、第 10 章の De Meester の記述である。食道からの出血の病態について、彼の最も得意とする食道の生理学を基礎として、内圧にも言及し、機能と形態との両面からのアプローチは、新しい局面を消化管出血に導入し、この本を更に面白くしている。

その他の著者をみてもわかるように、消化器病学の流れを全体的に捉えて、広い見地から消化管出血を捉えている Eastwood (Augusta) や、治療学では、古くから今まで続けて信念をもってこれにあたっている Fleischer (Washington D.C.) や Jensen (Los Angeles) をはじめ、Sivak

(Cleveland) と、世界的な学者が綺羅星の如く名を連ねている。この中に、本邦から唯一の著者として、Idezuki (Tokyo) の名がみられる。外科の立場から、食道静脈瘤の出血（門脈圧亢進症）に対する治療の著述である。Turcotte (Ann Arbor) の Shunt-op. に対して、出月氏の Transection は、original の術式から、器機吻合を用いる新しい手法に至る記述がなされており、興味をもって読むことができる。

1 冊の本で、病態から、診断そして治療、これも、保存的治療のみならず、外科治療にも言及されたものは、数少ない。そのうえ内容的に、各項をみると、かなり突っ込んで深い洞察がなされている。編者の意図がこのあたりに読みとられる新しい考え方の構成が、読んでいて実に楽しいと共に、感心させられた、最近めずらしい書物であった。

●Published by Igaku-Shoin Medical Publishers, Inc., New York, 584 pp. 160 figs. 1992 定価 ¥25,700 (税別)

医学書院洋書部 (☎03-3817-5670~1)